

藤倉恒雄著 『ティリッヒの神と諸宗教』(新教出版社、1992年、262頁)

芦名 定道

本書は、先年『ティリッヒの「組織神学」研究』(新教出版社)において、ティリッヒの『組織神学』の全体的な構図を提示した著者が、その延長上において、『組織神学』以降のティリッヒ神学の展開とその意義を論じた労作である。つまり、「『組織神学』……を完成させる頃にすでに構想していた、キリスト教をも超える〈具体的な神的靈(性)の宗教〉の概念と、将来の神学を方向づけるに至る経緯を考察する」ことを目指し、ティリッヒが「その神学的修正に至る必然的過程をティリッヒの神概念を中心」に後づけること、これが本書のねらいである。また、最近のティリッヒ研究において、その宗教論、とくにいわゆる「宗教の神学」との関連を論じた研究は少なからぬ数にのぼり、その点で本書は最近のティリッヒ研究の動向を反映したものと言える。著者は以上の課題に取り組むために、まず、ティリッヒの神概念の形成をシェリングからの影響という観点より分析し(第一章)このようにして形成されたティリッヒ神学の内容を、聖書的宗教と存在論の総合、キリスト論(新しい存在)について考察する(第二、三章)。そして最後に、『組織神学』以降のティリッヒ神学の展開を普遍主義的神学(具体的な神的靈性の宗教)と特徴づけることによって(第四、五章)ティリッヒ神学が将来の神学形成に対して持つ意義を明らかにしようとする。以下、本書の各章の議論を、必要なコメントを加えつつ紹介し、その後、本書全般に関わる問題点を検討することにしたい。なお、訳語の問題については省略する。

第一章において、著者はティリッヒが西洋近代の文化の混迷状況の中で世界宇宙を統一的総合的に解釈する「学的世界観」を確立しようとした神学者であると説明することから議論を始める。この総合的な世界観の基礎である宗教と文化の統一を可能にするのが「究極者としての神概念」であって、そこから「学的世界観」の再建には聖書に啓示された神概念の回復が要求されることになる。これを具体的に遂行するためにティリッヒが採用したのがドイツ古典哲学の「総合の道」であり、この過程でティリッヒはシェリングから決定的な影響を受けることになった。著者がティリッヒにおける神概念の形成をシェリングの影響という観点から説明しようとするのは、こうしたティリッヒ理解に基づいてのことなのであって、それは思想形成期のティリッヒの問題意識を適確に表していると言えよう。シェリングの影響の意義は、ティリッヒ自身はもちろん、ティリッヒ研究者の一致して指摘する点であり、現在我々はティリッヒとシェリングの緻密な比較研究を参照することが可能な状況にある(研究状況については、八九年のヤールの『形態形而上学としての神学』一九~四三頁を参照)。

本書は、ティリッヒの存在論的枠組、そして晩年の宗教史理解(とくに「具体的な神的靈(性)の宗教」)が、シェリングの積極哲学の影響を反映していることを、「存在自体」としての神、「行為する神」、「総合としての神」という三点から説明する。その詳細は本書を実際に御覧いただくしかないが、要点は次のようなものである。「彼(シェリング)は消極哲学の体系的形式に対して実存主義的立場より抗議し、実在世界の非完結性と、〈觀念の中に幽閉し得ない力動的な神〉、〈歴史の中の相対的な一総合に幽閉されることなく、新しい総合に向って行為する神〉、〈人間を新しい概念と総合に召し出す神〉といっ

た神概念を主張するようになる」。著者は、ティリッヒのシェリング研究（二つの学位論文など）と、シェリングの『人間的自由の本質』、『神話と啓示の哲学』を比較検討することによって、ティリッヒの神観念の形成に対して、以上のシェリングの神理解が影響していることを説明する。後に述べるように、シェリングの影響の思想史的意義を個々の細部にわたって評価することは決して容易な作業ではなく、本書にもこの点で少なからぬ問題が存在する（とくに象徴論とキリスト論に関して）。しかし、著者がシェリングの影響とともに、シェリングとの相違にも言及していることは注目すべきであろう（七五～八二頁）。

第二章では、第一章の要約を行った上で、こうして形成されたティリッヒ神学の内容の分析がなされる。まず、著者はティリッヒ神学の基本的課題を聖書的宗教と存在論との総合として規定し、この連関で、神を偶像化する宗教に対する「神自身の戦い」や「神的靈（性）の宗教」の顕現といった教会史（宗教史）の諸問題、あるいは現代の宗教的状況（擬似宗教の時代）における「答える神学」の意義など、ティリッヒ神学の重要テーマを論及する。したがって、この章の中心点は主として『聖書的宗教と究極的实在の探求』を資料とした「聖書の啓示宗教」と存在論との関係分析ということになる。これはティリッヒ神学を評価する場合のポイントの一つであり、これだけでも広範な研究が必要になる。その点で本書の論述は問題の掘り下げに関して不満が残るが、著者が行うティリッヒの議論の要約、つまり様々な対立にもかかわらず「聖書の宗教が存在論との総合を必然のものとしている」というまとめは適確なものと言えよう。

続く第三章では、聖書の宗教と存在論との総合というティリッヒ神学の基本問題が、「新しい存在」（キリスト論）という観点から扱われる。この章の論旨は、ティリッヒにおいては受肉、新生などの教理が「新しい存在」との関係で概念化（再解釈）されていること、そしてこの点に聖書的宗教と存在論の総合が確認できるというものである。これはティリッヒ神学の核心点であると同時に、批判が最も集中する部分に他ならない。典型的かつ通俗的な批判としては、存在概念の導入によって、キリストの出来事が非歴史化あるいは抽象化されたという批判が挙げられる（＝存在論化）。これがティリッヒ神学の枠組において諸宗教の存在意義はいかに理解できるのか（とくに原啓示と救済啓示の関係）という問題にも関わることを考えれば、本書にとってもこの批判の検討は避けて通ることができないはずである。しかし、これについてのまとまった言及は見られない。おそらくこれは、ティリッヒに批判的な立場の読者はもちろん、ティリッヒに好意的な読者も、本書の物足りなさを感じる点の一つであろう。

第四、五章では、以上のティリッヒ神学の形成過程と内容の検討を前提として、いよいよ『組織神学』以降のティリッヒ神学の革新の問題が論じられる。これはエリアーデの証言などで有名になった問題、つまり、ティリッヒが『組織神学』第三巻が出版された時期には、『組織神学』の神学体系の革新の必要性を感じその構想を展開しつつあったという問題（思想の発展史的問題）に直接関わるだけでなく、「宗教の神学」、「解放の神学」、「エコロジー神学」といった現代神学の新しい動向との関連でティリッヒが論じられる際のポイントの一つでもある。第四章で著者は、このティリッヒ神学の革新という事態を普遍主義的神学という表題でまとめ、ティリッヒがこの構想に至った経緯の説明から議論を始める。ティリッヒの神学体系の革新を動機づけたものとして、著者が挙げるのは、エキュメ

ニカル運動との関わり（とくにカトリック神学との関係）、キリスト教以外の諸宗教との出会い、そして新宗教運動の影響の三点である。これらを背景にして、ティリッヒは「次代の神学、未来の神を方向づける〈今一つ〉の一層包括的、普遍的な神学体系の構成を神学者の急務と感じる」ようになった（一六二頁）。西欧主義を超えた「普遍主義神学」を目指す場合に、キリスト教の宣教は諸宗教との本格的な出会いの中でいかに行われるべきか、という実践的かつ理論的な難問が生じることになるが、著者によれば、この問いに関するティリッヒの立場は、共通の真理を求める他宗教の信仰者との「対話」において遂行される、キリスト教の自己変革を伴った宣教（改宗・対決から対話へ。「新しい存在」と潜在的な霊的共同体との顕在化）とまとめることができる。さて、ティリッヒの普遍主義的神学の構想は未完に終わったが、これを具体的に遂行するための方法論として注目されねばならないのが諸宗教の「動的類型学」である。本書ではこの方法論の理論的基礎の立ち上がった考察がなされていない点で不満が残るが、この問題を論じる場合の最重要文献である『キリスト教と世界諸宗教との出会い』の内容の比較的詳しい紹介がなされており、ティリッヒが諸宗教との「対話」ということで具体的に何を考えているかについては、本書の叙述より十分に理解できるであろう（一九三～二〇三頁を参照）。

最後の第五章では、第四章の「普遍主義的神学」の中でも、とくに「具体的な神的霊性の宗教」を中心に考察が進められる。「具体的な神的霊性の宗教」とは、動的類型学によって取り出された諸宗教の構成要素（「聖典的基礎」、神秘主義的批判、倫理的批判）を統一調和させたものとして位置づけられ、宗教史がその実現を目指して進んでいるテロスとして説明される。なお、著者が指摘するようにティリッヒがこのような宗教のテロスの典型的実例として念頭に置いているのはパウロの聖霊論である。この章において最も注目すべき点は、ティリッヒの「神的霊性の宗教」とシェリングの「哲学的宗教」（自由の霊の宗教）との関係の説明であろう。著者はティリッヒの普遍主義的神学が「若き日に学んだ〈哲学的宗教〉への還帰」として理解できると主張しているが、これは我々がティリッヒ神学をその形成の全過程にわたって首尾一貫して解釈するための重要な視点を与えてくれると思われる。

これまで我々は本書の各章の内容を順次検討してきたが、次に本書の論述全体に関わる問題点を指摘してみたい。ティリッヒは多様なテーマをしかも長い年月をかけて思索し続けた思想家であり、このような思想を全体として分析するために研究者がこれまで採用してきた方法論は、大きく次の二つのタイプに分けられる。つまり、思想体系の再構成と思想発展（＝思想の発展史）の再構成の二つである。著者の前著作がティリッヒの神学体系の解明を目指しているのに対して、本書の基本性格はティリッヒの発展史的研究と考えられる。それは、「神概念の形成（シェリングの影響） 『組織神学』を中心に展開された神学体系 その神学体系の革新」という本書の構成に明確に現れている。したがって、本書の全体的評価も、ティリッヒの発展史的研究に関連した問題と体系分析に関わる問題とに分けて行うのが適当であろう。

発展史の視点から。本書の中心的な論点の一つはティリッヒ思想の存在論的枠組の形成がシェリングの影響下で行われたということである（一八頁）。しかし、本書で言う「存在論的枠組」とは何であろうか。もし、「形成 展開 確立 革新」という思想の発展史を論じようと言うのであれば、「存在論」という概念自体の意味の変遷がまず問われねば

ならない。確かに、「ティリッヒ神学 = 存在論的」という図式はかなり一般化したものではあるが、最近のティリッヒの発展史的研究が示すように、ティリッヒの言う「存在論」の意味内容にはいくつかの大きな転換が見られる。二三年の『諸学の体系』、二七/二八年のドレスデン講義、三三年の『社会主義的決断』、そして五〇年代の『組織神学』第一、二巻を比較するならば、本書にも見られる「ティリッヒの思想の存在論的枠組」という単純化された表現が問題的であることは了解可能であろう。この「存在論」概念の変遷や発展を考慮したティリッヒの神概念の発展史的研究こそが今後のティリッヒ研究の課題なのである。同様の問題は、「宗教史」概念に関しても指摘できる。書評者の私見を述べさせてもらえば、二〇年代のティリッヒ神学のキー・ワードの一つである「宗教史」(あるいは「精神史」)は「文化の神学」の諸問題の歴史的な問題状況を明確化するための図式(自律と他律の統一あるいは未分化 自律の分離とそれに対抗した他律の反動 新しい神律の探求)として、つまり「宗教と文化」という問題連関に位置するものと考えられるべきであって、現在「宗教史の神学」という問題連関で使用される「宗教史」概念を準備するものではあっても、それとは本来区別されるべきものなのである。こうした基本概念の発展史は、最近のティリッヒ研究の主要な成果の一つであり、もし本書がドイツ語圏におけるティリッヒの宗教論の代表的な研究(シュッスラー、レップなど)を参照して書かれたならば、より厳密な論述が可能になったであろう。

また、「シェリングからの影響」という問題についても一言しておこう。シェリングの影響の決定的な意義は著者の指摘する通りであるが、これを厳密に評価することは決して容易な作業ではない。例えば、神概念の個々の部分に関して、ドイツの古典哲学の他の思想家からの分離された純粋にシェリングからのみの影響をどの程度抽出できるであろうか。むしろ、これまで「シェリングからの影響」と呼ばれているものには同時代のヘーゲルやシュライエルマッハーからの影響が複雑に交錯しており、神概念に関して言えば、これにティリッヒの師であるケーラーからの影響も絡んでくる。さらに、このケーラーの神概念についても、ヘーゲル、シェリングらの影響が問題になる(リンクのケーラー研究を見よ)。ティリッヒ研究は、個々の思想家の影響の指摘という段階から、思想史(神学と哲学を含めた)における錯綜した影響関係の分析という段階に今後進まざるをえないであろう。

次に体系の観点から。ティリッヒは基本的に体系志向タイプの思想家であり、神概念はそれと関連した様々な基本概念との関係においてはじめて理解可能になる。本書は、ティリッヒの神概念、あるいは宗教概念を問題にしたものであるが、神、宗教、啓示といった諸概念の関係については明確な規定が見られない。この点は著者の前著の問題とすべきものかもしれないが、前著を含めても宗教概念をはじめとした基本的な諸概念にあいまいさを感じるのは書評者だけであろうか。同様のことは、ティリッヒ神学の方法論の説明に関しても見られる。とくに、気になるのは「動的類型学」である。これは「宗教史」の議論を展開するための中心的な方法論として位置づけられるものであるが、これに対してはこれまでいくつかの批判がなされてきた。例えば、ティリッヒの類型論は宗教現象学に依拠するものであり、歴史的事実の固有性・特殊性を把握できない、その点で宗教史理解の方法としては不適当である(パネンベルク)、あるいはティリッヒの宗教論には複数の類型論が存在しそれらの関係が明確に規定されていない(ファースタ)、といった批判であ

る。これらは、ティリッヒの「普遍主義的神学」の基礎に関わる重要な批判であり、これらに著者はどのように答えるのであろうか。

本書は最近のティリッヒ研究の動向から見て現在最も注目されているテーマをバランスよく扱っているだけでなく、今や神学の重要テーマの一つとなりつつある「宗教の神学」の議論を深める上でも多くの貴重な見解を示している。それゆえ、本書をもとにして、狭い意味でのティリッヒ研究者だけでなく、現代神学の新しい展開に関心のある者も含めた幅広い論争が今後期待できるであろう。